



越冬キュウリ

第一集出荷センター
営農指導員 川島 俊一

農業 テクニカル ダイアリー

Agricultural-work technical diary



ソラマメ

やさいの里営農センター
営農指導員 初芝 浩

温度管理は午前中に27〜30度、午後から徐々に温度が下がるよう調整し、日没から午後9時ごろまでに13〜15度になるようにします。最低気温は11度

温度管理と整枝方法

追肥や灌水のタイミングを判断するには、開花雌花の大きさや実の形、芯葉の色ついで確認します。一回の量はあまり多くせず、灌水の度に薄く施用するよう心がけましょう。

収穫が始まってからの管理

定植の目安は本葉3枚程度で、定植直後〜活着するまではたっぷりと灌水を行い、その後は樹勢を見ながら灌水を調整しましょう(樹勢が弱いようであれば多めに、強いようであれば調整程度)。

定植〜収穫までの管理

越冬栽培は、9月播種、11月〜(長い人で)6月まで収穫するような作型です。播種後から、日射量や気温が低下するため、樹勢の維持管理にはとても気を使う栽培です。



写真① 株全体の萎縮



写真② ウイルス病発生圃場

病害虫防除

新規ウイルス病害

やさいの里管内の圃場では、ソラマメに萎縮などのウイルス病と思われる症状(写真①、②)が数年前から確認されています。昨年も同様の症状が確認され、国および県の研究機関に持ち込み、数回にわたり検定を行ったところ、ポリミキサ菌によって媒介される土壌伝染性の新規ウイルス病害であることが判明しました。

このウイルスに感染した場合、株の萎縮症状、葉にえそ輪紋、莢にえそ症状(写真⑤、⑥)が現れるのが特徴で、早期

厳寒期に入れば虫の飛込みはほとんどありません。しかし、ハウスに残つて

病害虫について

このことから、つるが間延びするからと言って、温度を下げてても効果がなく、適正な温度管理を行い、果実の肥大を早めるようにすることが重要です。

また、曇雨天時には、低温・過湿状態になりがちなので、徒長しやすくなります。日中も暖房機や送風機を稼働させたりすることで、18〜20度に管理するよう心がけましょう。

このつる下ろし栽培では、果実の肥大の良し悪しで、力枝の伸び方が変化します。肥大不良のものは伸びやすく、肥大の良いものは温度が高くて間延びせず伸長します。

また、夜明け前から積極的に加温することによって、効率よく同化作用が行えるため、収量アップには効果的です。つる下ろし栽培は、定植時期や樹勢、ハウスの環境により考慮する必要がありますが、下からの側枝2本を5〜7節で孫枝に更新し、中〜上段の2本の側枝も4〜6節で子孫に更新する方法が一般的となっています。

初めは小さな斑点が現れ、症状が進むと大型斑点となり莢へ拡大します。降

赤色斑点病

現在できる対策としては、①連作を避ける、②ウイルス病と思われる症状が確認された圃場では、発病株を抜き取る、③トラクターなどの管理を最後に行い、土壌を他の圃場に持ち込まない、の3つです。

実施し、その対策を検討しています。

に発病すると生育が停止し、収穫に至らないこともあります。現在、現地圃場にて土壌消毒試験(写真③、④)などを実施し、その対策を検討しています。

土壌消毒の試験経過



写真③ C剤散布地区



写真④ B剤散布地区

写真③よりも写真④のほうがやや草勢がよく、病害の抑制効果が確認できます。無処理区ではかなりウイルス症状が発生しました。(写真⑤、⑥)

(現在、千葉県農林総合研究センターと協力し、農業の適用拡大に向けて管内圃場にて実証実験を行っています)



写真⑤ 無処理区(葉の病斑)



写真⑥ 無処理区(莢の病斑)

雨後に多く発生するため、3月以降、降雨後の予防散布が効果的です。また、肥料切れや排水不良の圃場でも発生が多くなりますので注意しましょう。

さび病

4月以降、白い斑点の中に褐色のさび状の病斑が発生します。発生しやすい下葉を観察して、早期防除に努めましょう。

アブラムシ類

害虫ではアブラムシの防除が中心となります。殺虫剤散布だけでなく、摘芯も組み合わせて発生を防ぎましょう。定植時のアドマイヤー1粒剤も効果的です。

いる虫が繁殖し、被害を出す恐れがあります。収穫初期のうちに定期的に薬剤を散布し、厳寒期に虫を残さないよう心がけましょう。

また、乾燥させすぎるとうどんこ病に、低温・過湿はべと病や菌核病発生につながります。ハウス内の温湿度管理を徹底し、ムラができないよう十分気を付けるとともに、天候不順時には予防剤の散布を忘れずに行いましょう。



7月の分析経過について	
多成分一斉分析	合計0点
残留農薬分析点数	※7月は実施なし。

土壌診断点数 …… 合計121点